

## 到達目標の学習目標化を 促す教師の教授行為

小学校2年生体育科「ドーナツボール」  
の授業の事例的研究

広島大学学校教育学部・助教授

木原成一郎

広島大学付属小・教諭

林 俊雄

### はじめに

授業の過程は、教師の教えと子どもの学びが交差する接点で進行する。研究の対象たる授業がこうした過程的な性格をもつために、到達目標・評価論の授業論において「到達目標の学習目標化」と呼ばれる課題の論究が行われてきた。本研究の目的は、小学校体育科の授業において、この「到達目標の学習目標化」という課題を促す教師の教授行為の留意点を明らかにすることにある。

そこで以下次のように論を進める。まずⅠの1)で到達目標・評価論において「到達目標の学習目標化」の課題がどのような問題を解決するために提案されたのかを検討し、体育科においてこの課題を考察の対象にする必要性を検討する。次にⅠの2)で体育科においてこの課題を扱った先行研究を検討し、指摘されてきた知見を整理する。Ⅱでは、小学校2年生を対象とした体育科の授業を事例的に検討し、これまで「到達目標の学習目標化」に関してあまり論究さ

れていないと思われる球技運動教材の指導において有効に作用している教師の教授行為を指摘する。最後に明らかになった留意点と今後の研究課題をまとめる。

### Ⅰ 到達目標・評価論における「到達目標の学習目標化」の課題

#### 1) 「到達目標の学習目標化」の提案の意図

滝沢孝一は、「到達目標の学習目標化」を「子どもたちを『学ぶ主体』にしていくこと、いいかえれば到達目標を“教える側の目標”から“学ぶ側の目標”に発展させ、深めていくこと」と説明する<sup>2)</sup>。子どもの学力形成のためには、教師が到達目標を基準にして子どもの知識や技能のつまづきを明らかにする形成的評価を実施し、そのつまづきを回復する指導が必要となる。しかしながら、その到達目標をもし子ども自身が学習の目標と把握していなければ、子どもにとってその回復指導は到達目標を一方向的に詰め込む強制的な指導と同じ意味をもってしまう。「到達目標の学習目標化」は、子どもの主体的な学びを保障するために不可欠な課題である。

「到達目標の学習目標化」は、滝沢によれば次の二つの場面で生じるとされていた。まず第1は、前時の形成的評価の結果から必要なことを復習した後に、その日の授業の「学習課題を子どもたちとともに発見していく」場面である。第2は、授業の学習活動の場面で、教師が子どもの「心をゆさぶり葛藤させていく」ために工夫した教材・教具を提示した場面である<sup>3)</sup>。

滝沢はそれらの場面の教師の教授行為として、小学校の算数の授業での教師の発問や教具の提示の例を挙げている。ここでは、子どもに「ど

うして」と疑問を持たせたり「自分の考えと違う」と考えさせることを契機に、教師が提示した到達目標が子どもの学習目標に転化するとされている<sup>4)</sup>。

本稿の検討対象である体育科の授業では、できなかった動作ができるようになることが学習課題とされることが多く、発見したり疑問を持ったりする学習が課題とされることは少ない。ただし、学習課題は異なっても子どもの主体的な学びを導くために、「到達目標の学習目標化」の具体化は不可欠な課題である。これまで体育科では、「到達目標の学習目標化」を、どのような場面でどのような教師の教授行為によって具体化しようとしたのであろうか。

## 2) 体育科の授業における「到達目標の学習目標化」の課題

ここではIの1)でとりあげた滝沢の二つの場面の区分を採用し、それぞれの場面ごとにこれまでの先行研究を検討する。

まず第1に、教師がその日の授業の学習課題を学級の子どもたちと一緒に発見していく場面をとりあげた先行研究に小林一久の研究がある。小林は、到達目標を規準とする評価行為を具体化した体育科の授業研究の意義を、評価行為の実施にとどまらず、「教える内容をいかに科学化するかということと、それが子どもの課題意識にどう転化するかを含んで問題にされる」点に求めていた<sup>5)</sup>。つまり、小林は到達目標・評価論の授業には、到達目標の内容的側面の科学的研究に加えて、その指導過程に「到達目標の学習目標化」の課題が存在することを指摘していたと考えられる。

「到達目標の学習目標化」の具体例として、小林は徳永隆治教諭の指導による広島大学付属小学校2年生の投動作の授業をとりあげた。その日の授業の「達成目標」<sup>6)</sup>は、「ボールをより遠くへ正確に投げるために、腰のひねりがポイントになることに気づき、腰のひねりを使って投げられるように練習すること」であった。この指導場面は、「腰のひねり」という動作が、「ボールをより遠くへ正確に投げる」ために習得すべき動作であるということ子どもたちの学習目標に自覚させるために、学級の子ども全体に徳永教諭が発問する場面である。この場面の「教師の指導の要点」は、「腰のひねり」を意味する「まがってる」という子どもの言葉に一度同意しながら、腰を前に折り曲げた動作を自分で示して、投げるときの曲がり方と比較させ、子どもの思考をゆさぶって、「回転」という言葉を引き出し、さらに「ねじれてる」という言葉を引き出すということであった<sup>7)</sup>。

この授業では新しい動作が学習課題になるので、まずその動作を子どもが一斉に練習してから、次の一斉指導の場面でその練習の体験に基づき学習課題の提示が行われる。到達目標の内容であり学習課題ともなる動作自体が感覚的な内容を含んでいるために、それをまず練習で体験させる。次にその到達目標である「腰のひねり」を子どもの学習目標に転化させるために、子どもに直前の体験と目前の示範を比較させながら教師がゆさぶりの発問を子ども全体に投げかける。その発問への応答の中で子どもの思考がゆさぶられ、「腰のひねり」という学習課題を自分の学習目標として納得するのである。

この小林の研究により、感覚的な実感を伴っ

た動作の習得が学習課題となる場合においても、その日の授業の学習課題を発見していく場面では、教師の発問による子どもの思考のゆさぶりが、「到達目標の学習目標化」に有効である場合があることが示唆された。

第2に、授業の学習活動の中で、教師が子どもに指導して「到達目標の学習目標化」を促す場面を考察した先行研究を検討する。阪田尚彦は、動作の獲得という到達目標が、感覚的なものを含むとともに、その学習の経過や結果が瞬時に消えてしまうという特徴を持っていることを踏まえ、体育の授業で到達目標が子どもの学習目標に転化するためには、個々の子どもに対する直接的な指導が必要であるとする。その指導とは、教師が授業の過程で「瞬時的、即時的」に子どもへ言葉をかけることである<sup>8)</sup>。阪田によれば、子どもに跳び箱運動の台上前転という新しい動作を指導する際、踏み切り動作の腰の位置があがってくるという動作の変化の事実を「瞬時的、即時的」に教師が捉え、その動作の変化を子どもに知らせて確認してやるのが台上前転の動作の習得のポイントになる。つまり、新しい動作の習得のポイントとなる動作の変化を「瞬時的」に教師が捉え、「即時的」に子どもに知らせるといった教師の教授行為が、新しい動作の課題を子どもに感覚的に実感させるというのである<sup>9)</sup>。

また木原成一郎は、西垣豊和教諭の指導による舞鶴市立網野南小学校6年生の鉄棒運動の授業を例にとり、腕立て前転を指導した授業記録の中の教師の指導言語の質を分析した。検討の結果、子どもの運動中か運動直後に子どもに投げかける教師の言語が、その子ども自身が意識

して動かしている身体の部位の運動経過をイメージさせる言葉であれば、これまでできなかった新しい動作を筋感覚や視覚等の感覚を通じて、子どもが意識的に練習したと思われる事例が見い出された。その事例では、教師の言語指導の直後、複数の子どもたちが次々と腕立て前転の動作ができるようになっていった<sup>10)</sup>。この教師の言語指導は、新しい動作の獲得という到達目標を子ども自身の意識的な練習の課題に転化する効果を生んだのであるから、授業の過程における「到達目標の学習目標化」の役割を果たした教授行為と考えられる。

この阪田及び木原の研究により、次のような教授行為が「到達目標の学習目標化」に有効な場合があることが示唆された。つまり、子どもの動作の練習の場面に並行して「瞬時的、即時的」に、つまづいている動作を行うときにその子どもが意識する身体部位の運動経過がイメージできるような言葉を教師が子どもにかけてやることである。

ところでこれらの小林及び阪田、木原の研究で紹介された事例は、すべて個人の動作の習得が中心的な課題となる陸上運動や器械運動などを教材とした場合であった。一方、体育科の球技教材の授業では、個人の動作に加えて、複数の子どもが集団で実行する動作の習得が課題となる。ここでは「到達目標の学習目標化」のために、どのような教師の指導が必要となるのであろうか。

## II 球技運動教材の授業の事例的検討<sup>11)</sup>

### 1) 攻防入り乱れ型球技運動教材の「ドーナツボール」が担う教育内容

サッカーやバスケットボールのようにコートがネットで区分されず、攻撃と防御が入り乱れる型のボールゲームでは、ボール操作や自分の身体操作という個人の動作に加えて、ボールの動きと味方の動き、さらには敵の動きを予測し、攻防の切り替えに応じて自分の必要な動きを判断しかつ実際に動くことが求められる。特にこれらの内容の中で、「2人以上のコンビネーションによるパス攻撃」<sup>12)</sup>、つまり防御の動きを予想した2人以上の味方同士のパスによる攻撃の動きが、「球技運動の基礎技術」<sup>13)</sup>とされている。この「2人以上のコンビネーションによるパス攻撃」が、攻防入り乱れ型の「球技運動の基礎技術」とされる理由は、次の3点である。第1に、球技のゲームにおける身体運動が、そもそもボールを媒介とした敵と味方、又は味方と味方の相互関係の運動であること<sup>14)</sup>。第2に、個人のドリブル攻撃はパスの変形と考えられ、パスによる攻撃をより有効に作用させる手段と考えられること<sup>15)</sup>。第3に、防御技術は、攻撃技術が高まることによって、その必要性が生じるものであること<sup>16)</sup>。

このような攻防入り乱れ型の「球技運動の基礎技術」の考察を踏まえて、それらを小学校の授業の教材として用いる場合、その教材が担う教育内容は、2人以上の味方同士でパスを投げたり受けたりすることを通じてシュートする「コンビネーションによるパス・シュート」という運動技術と考えられる<sup>17)</sup>。

ただし、小学校段階では子どもの動作の発達や身体発育の段階を考慮すると、既成の競技スポーツをそのまま用いて「コンビネーションによるパス・シュート」を教えることは不適當で

ある。そこで、小学校低学年の子どもに「コンビネーションによるパス・シュート」を教えるために、試合の反則事項やコートの形、ゴールの広さ等のルールを工夫して「ドーナツボール」という教材がつくられた。

## 2) 「ドーナツボール」の単元レベルでの目標分析と教材計画

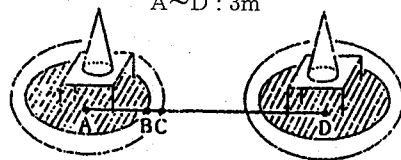
### a) 「ドーナツボール」のルール

林俊雄教諭が広島大学付属小学校2年生に指導した「ドーナツボール」教材のゲームのルールは図1<sup>18)</sup>のように決められた。

#### ○コート

下の図のようなコートで行う。図のような大きさの二重円を描き、中心にカラーコーンをのせたボートボール台をおく。(この二重円をドーナツに例えているわけである。)

A~B: 2m  
A~C: 2.5m  
A~D: 3m



#### ○試合人数

1チーム4人で、4対4の試合を行う。(攻防入り乱れ形ゲーム)

#### ○使用ボール

ドッジボール0号

#### ○ルール

- ・歩数制限なし。ボールを保持したら持って走るか、パスを使ってボールを運ぶ。
- ・危険な身体接触は禁止。
- ・それぞれ相手チームのカラーコーンにボールを投げ当てれば得点となる。(カラーコーンを倒せば2点、倒せなくても当たれば1点)
- ・責め側は外円より内側には入れないが、守り側は内

円まで入ってもよい。(〔図1〕の斜線部分は両チームとも入れない。)

・ゲームは、ジャンケンで勝ったチームのボールで開始し、得点後は得点されたチームのボールとなる。

#### 図1 「ドーナツボール」のゲームのルール

(林俊雄『「ドーナツボール」の授業づくり』山本貞美編『新学力観に立つ体育科授業モデル30選』明治図書1995年、p.24.)

1 チーム4人で構成する理由は次の2点である。第1は、ボールを持った子どもが味方にパスするときパスの相手を選択できるように最低味方が2人必要であること。第2は、チームで練習する時に二人ずつのペアで練習できるように偶数の人数にする必要があったことである。そして市販されている中で最も小さい0号ボールを使用した理由は、ボールのパスやシュートの動作が、手の小さい子どもでも片手でできるようにするためである。

また敵と味方の危険な身体接触を禁止しボールを保持したまま走ることを許すルールは、子どもがパスやランニングで味方のゴール前から敵のゴール前まで移動し、シュート動作を行う機会を増やすために設定されている。さらに、ゴール前の外円と内円の間に守る人が入り、外円の外に攻める人が位置するルールは、攻撃と防御の人の間のこぜりあいをなくし、ゴール前でパスやシュートの動作がうまれやすくすることをねらっておかれている。

#### b) 「ドーナツボール」の目標分析と教材計画

「ドーナツボール」の単元は、次の表1<sup>10)</sup>のように展開された。教師が子どもに単元全体を通じて示した単元目標は、「ゲームで全員がシュートして得点することができる」であった。この単元目標は、到達目標化の容易な「コンビネー

ションによるパス・シュート」という運動技術と、その運動技術を学級の全員が達成することを大切と考える価値観という方向目標に区分される。

前者の「コンビネーションによるパス・シュート」という運動技術は、「ゴール前の防御のいない位置からシュートすることが有効な得点方法であることがわかる」という知識の理解の到達目標と以下の動作の実行の到達目標に区分される。動作は、①「ゴール前で防御のいないコートの位置を見つけることができる。」②「ゴール前の防御のいない位置に走り込むことができる。」③「ゴール前の敵の防御のいない位置にいる味方にとりやすいパスを投げることができる。」④「ゴール前の防御のいない位置で味方からのパスを受けることができる。」⑤「ゴール前の防御のいない位置で防御がくる前にシュートしてゴールを倒すことができる。」という5つの到達目標に細分化される。

これらの到達目標を達成するために、単元は表1にあるように4次の段階に区分されている。次節の言語指導の事例に関係する第2次と第3次の教材計画を中心に以下説明する。

これらの到達目標が授業の練習や試合の場面で習得されるためには、4人で構成される1チーム内で、まず各自の攻撃と防御の動きが作戦として合意されることが必要となる。そこで、「作戦図」という教具が各チームに配布され、第2次以降最後の授業まで、試合の前に必ず作戦づくりの学習活動が設定された。さらに、動作の到達目標の③と④と⑤を達成させるための教材として、図2のNo.1,2,3の3種類のパスの練習が子どもに提示された。

表1: 「ドーナツボール」の単元展開

(この単元展開を作成する上で以下の文献を参照した。林俊雄「ドーナツボールの授業づくり」山本貞美編『新学力観にたった体育科授業モデル30選』明治図書、1995年、pp.25-26。齊藤紀子他「ボールゲーム指導における『全員シュート』の意義と授業づくりの課題」広島女子大学家政学部児童学科中瀬古研究室1994年度卒業論文第3章及び巻末資料。)

(第1次と第4次は紙数の関係で詳細は省略した。右端の欄の「オレンジ・赤グループの日記」の内容は、林先生が体育の授業のあった日に、その日の体育の授業に関する感想を絵と文章で自由に書いてくるように指示した宿題の絵日記に書かれた文章部分の内容を要約したものである。)

段階	月日	教師の教授活動	子どもの学習活動	オレンジ・赤グループの日記
第1次<学習方法の理解中心> メンバーの編成や学習を進めるのに必要なグループ内の係りの役割を理解させる	5/10	・メンバーの編成や学習を進めるのに必要なグループ内の係りの決定、試合の進め方等の学習方法を理解させる。		
	5/12	・教師がルールの説明をしながら、試しに子どもたちがゲームをする		
	5/13	・試しのゲームでシュートできない子がいた事実を指摘し、シュートしたかったと書いたシュートできなかった子どもの感想文を紹介し、誰もがシュートしたいという気持ちに共感させる <教師の都合で授業が中断>		
	10/4	・メンバーの編成や学習を進めるのに必要なグループ内の係りの決定、試合の進め方等の学習方法を思い出して、ゲームをする。		
第2次<練習中心> 試合でシュートできていない人がシュートを成功するために、ゴール前で敵のいない状況で味方からパスをもらいシュートする攻撃の必要性を理解させる  3種類の練習を経験させ敵の守りがいない場所にいる味方にパスをするために必要なタイミングと動作に気づかせるとともに、その動作が正確にできるように習熟させる	10/6	・敵の守りがいない場所にいる味方の攻撃の人がシュートできるようにパスをする仕方を説明 ・試合でシュートできていない人の数を確認し、試合で全員シュート成功の目標を確認	・試合の前に攻撃と防御の作戦をチームでたてる ・試合をする 第1試合: 赤対黄、青対オレンジ(審判: 緑) 第2試合: 赤対オレンジ、黄対緑(審判: 黄)	T男: 味方のゴールを居残り1人が守り3人で攻撃する作戦を紹介 S男: N子にパスしたが敵の防御でシュートできないことを指摘 A子: 記述なし N子: 守りがかたくてシュートできない。守りのいない所にシュートしていない人が行く作戦を試みた。
	10/7	・敵の守りがいない場所にいる味方の攻撃の人がシュートできるようにパスをする動作の練習方法と練習のねらいを説明	・短いパスと長いパスと攻撃4人対防御2人のパスの3種類のパス練習をして成功したパスの数を記録	T男: A子とN子が考えた作戦を実施する S男: N子の捕球と自分の捕球では手を出すタイミングが異なる A子: 記述なし N子: T男のアドバイスで下手投げでパスすると成功した
	10/11	・試合でシュートできていない人の数を確認し、試合で全員シュート成功の目標を確認	・短いパスと長いパスの練習をして成功数を記録する ・試合の前に攻撃と防御の作戦をチームでたてる ・試合をする 赤対青、緑対オレンジ(審判: 黄)	T男: シュート未達成が4人いたので残念 S男: N子にパスしたが捕球から投球に移る時間がかかりすぎ防御される A子: 記述なし N子: 防御1人居残り作戦がよかった
第3次<作戦中心> 2次で学習した練習のようなパスを成功させて、試合で全員がシュートできるようにするために、2次の動作の習熟を図る練習を続ける。 試合でシュートを成功させていない子どもの存在を理解させる また試合でシュートを成功できていないメンバーがシュートできるようにこれまでの練習の経験	10/14	・味方4人でパスからシュートの練習をさせ、捕球してすぐシュートすることと捕球の相手が取りやすいパスを投げることを必要を理解させ、動作を習熟させる。 ・全員の試合での得点を書いた一覧表を提示し、シュートできた子を確認し、まだできていない子を励ます	・4人のパスシュートの練習と成功したシュート数の記録 ・シュートできない子どもがシュートできる作戦作り ・試合をする(審判・オレンジ) 赤対青、黄対緑	T男: N子の捕球能力の向上の指摘とS男へN子が取りやすいパスを要求 S男: N子の捕球・投球能力の向上と投球の弱さの指摘、自分のパスの強すぎることを反省 A子: 記述なし N子: ジャンプボールの意味を理解した
	10/15	・作戦づくりの場面に個別に入り、各グループでパスを使ってシュートする作戦をたてさせる ・まとめて長いパスと短いパスの両方を使ったあるグループの作戦を紹介し、パスをつなげて連続して使う作戦を促す ・味方4人でパスからシュートの練習をさせ、捕球してすぐシュートすることと捕球の相手が取りやすいパスを投げることを必要を理解させ、動作を習熟させる	・4人のパスシュートの練習と成功したシュート数の記録 ・シュートできない子どもがシュートできる作戦作り ・試合をする(審判・赤) オレンジ対緑、黄対青	T男: N子がシュートして勝ったこと、もっと強いところに勝ちたいこと S男: 敵のいない味方にパスをしてすぐにシュートする作戦で勝ったこと A子: 記述なし N子: いいパスが送れるようになったのでもう少しいいシュートができそうだ、守りの作戦を立てていること

木原・林：到達目標の学習目標化を促す教師の教授行為

<p>を生かして、攻撃の作戦を立てる</p>	<p>10/17 (教室)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オレンジチームの作戦作りの場面の</li> <li>・ビデオと作戦図をみせ作戦会議に全員が参加する必要と、作戦図に個人の名前を記入してひとりひとりの動きを確認することの必要性を理解させる</li> <li>・作戦作り後のオレンジの試合のビデオを見せて、長いパスに失敗が多いことに気づかせ、短いパスの有効性に気づかせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオを見て作戦作りの重要性和短いパスが有効であることに気づく</li> </ul>	<p>T男：記述なし S男：記述なし A子：記述なし N子：記述なし</p>
	<p>10/18</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短いパスを使った作戦を立てて、まだ試合でシュートできていない人がシュートできる試合をさせる</li> <li>・味方4人でパスからシュートの練習をさせ、捕球してすぐシュートすることと捕球の相手が取りやすいパスを投げることを必要を理解させ、動作を習熟させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人のパスシュートの練習と成功したシュート数の記録</li> <li>・シュートできない子どもがシュートできる作戦作り</li> <li>・試合をする(審判・青) オレンジ対黄、赤対緑</li> </ul>	<p>T男：N子とA子にもっとパスを集めてシュートしてほしい S男：自分一人で試合していたので反省している A子：記述なし N子：得点表から自分だけがオレンジでシュートできていないことに気づきシュートしたいと思う</p>
	<p>10/25</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・味方4人でパスからシュートの練習をさせ、捕球してすぐシュートすることと捕球の相手が取りやすいパスを投げることを必要を理解させ、動作を習熟させる</li> <li>・守りを意識して攻撃がボールをもらうところに移動することやパスを受けたらすぐ投球することの必要を理解させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人のパスシュートの練習と成功したシュート数の記録</li> <li>・シュートできない子どもがシュートできる作戦作り(オレンジ赤グループの作戦作りを教師が個別に指導)</li> <li>・試合をする(審判・黄) オレンジ 対赤、青対緑</li> </ul>	<p>T男：試合は負けたがN子がシュートで1点取ってよかったと喜ぶ S男：負けても嬉しいこととしてN子の得点をあげ、A子が未得点であることと、オレンジ赤グループ全員の得点を望むと記述 A子：記述なし N子：ボールを保持した自分が前で防御する二人の敵の間をねらってシュートしたら倒れなかったけど命中した、今日のめあてがN子のシュート成功であった、オレンジでシュートしていないA子とB子を応援する</p>
	<p>10/27</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「十字架作戦」「戻し作戦」「後ろ隠し作戦」「ぐるぐる戻し作戦」という子どもたちの作戦を紹介し、相手の防御から逃げるために動くこととパスをすることの双方の必要性を理解させる</li> <li>・味方4人でパスからシュートの練習をさせ、捕球してすぐシュートすることと捕球の相手が取りやすいパスを投げることを必要を理解させ、動作を習熟させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人のパスシュートの練習と成功したシュート数の記録</li> <li>・シュートできない子どもがシュートできる作戦作り</li> <li>・試合をする(審判・緑) オレンジ 対青、赤対黄</li> </ul>	<p>T男：長いパスを敵に取られたので試合に負けたA子とN子がシュートできなくて残念S男：たてた作戦通りやってもうまくいかない A子：試合に負けたこととT男だけがシュートしたことで少しいやだった、早くシュートを決めてオレンジチーム全員得点を果たしたい N子：前はA子が教えてくれていたから今度は私が教えてあげる番だ</p>
<p>第4次 &lt;試合中心&gt; グループの多くの人が得点すれば試合にも勝てるボーナスルールを導入することにより、試合に勝ちたいという欲求も利用して、全員が試合でシュートするという目標を達成する</p>	<p>11/1</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1グループの試合での得点者が多ければ以下のようにボーナス点が加点されるボーナスルールを導入され、そのルールで試合を2ゲーム行う。 得点者-加点 1人-0点 2人-4点 3人-6点 4人-8点</li> </ul>		
	<p>11/4</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「戻しパス」を使った練習をさせ、「戻しパス」を使った作戦を使ってまだシュートしていない人にシュートを成功させるように指示し、ボーナスルールの試合を2回行う</li> </ul>		
	<p>11/8</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「戻しパス」を使った練習をさせ、「戻しパス」を使った作戦を使ってまだシュートしていない人にシュートを成功させるように指示し、ボーナスルールの試合を2回行う</li> <li>*最後のこの日の試合でN子は味方のゴール前から自分でボールを持って敵のゴール前までいき、目の前にいた敵の防御の頭の上を山なりに越すシュートを打ち、ゴールを倒して2点を得点した。結局N子は、防御のいない状態で味方からパスをもらってシュートするという動作を試合では一度も成功させることができなかった。</li> </ul>		





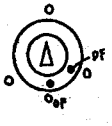
日にち	練習内容・方法	練習説明	日にち	練習内容・方法	練習説明
10/7 11	NO.1 <長いパス> 	4人が図のような位置につき、キャプテンを中心に隣の人へ順にパスをまわす。 時間は1分。ノーバウンドで成功したら1回とする。  ※攻めるときは散らばった方がパスしやすいから	10/14 15 18 25 27	NO.4 <シュート> 	4人は図のように位置し、1人ずつシュートをうつ。時間は30秒。 それたボールは近くの人がフォローしてシュート者にパスする。  ※パスをもらってすぐシュート、すぐ投げる練習パスする人も良いパスをする練習
10/7 11	NO.2 <長いパス> 	4人が2人ずつ分かれて長い距離のパス。パスしたら後ろの人と交代する。 時間は1分。コーンはどけてはいけない。 ノーバウンドで成功したら1回。  ※試合ではこのように反対側にパスすることもあるから	11/4 8	<もどしパス> 	パスーパスーシュートの練習。 ある1人がパスしたパスもどしてシュートする。  ※パスを素早くまわして相手のすきについてシュートする練習
10/7 11/1	NO.3 <4VS2> 	攻めは4人、守りは兄弟チームからかりて2人。 時間は2分。実践的な練習。  ※動きながらあいている人を見つけ、パスでき、パスを貰いやすい位置に動けるように			

図2 「ドーナツボール」で指導したパス及びパスからのシュートの練習の内容及び方法

(斎藤紀子他、前掲書、pp. 156-157. より引用)

また、第3次では動作の到達目標の③と④と⑤を達成させるための教材として新たに図2のNo.4の4人のパスーシュート練習が10月17日を除いて毎日提示された。10月17日は、「ゲームで全員がシュートして得点することができる」という単元目標の達成に作戦づくりが有効であり必要であると理解させるため、第2次の授業で録画した作戦づくりと試合のビデオとそのチームの「作戦図」を教材として教室での授業が実施された。第3次の作戦づくりの学習活動では、まだシュートできていない子どもがシュートできるような作戦をつくるという学習課題が指示された。

### 3) 「到達目標の学習目標化」を促す教師の言語指導

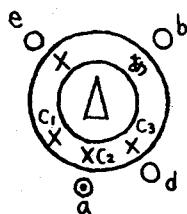
#### a) 授業の到達目標を提示する場面での学級全体への言語指導の例

単元の第2次の授業中に行う子どもの活動は3種類の練習と試合が中心であるが、その練習の意味が子どもに理解されていなければ練習の効果はあがらない。つまり、「ゴール前の防御のない位置からシュートすることが有効な得点方法であることがわかる」という知識の理解の到達目標が子どもの学習目標に転化していなければ、これらの動作の練習は単なる反復練習になってしまう可能性がある。そこで、10月7日の授業の冒頭の知識の到達目標を学級全体に提



表2 授業の最初の課題提示場面での教師の指導言と子どもの発言（1994年10月6日）  
 （斎藤紀子他「ボールゲームにおける『全員シュート』の意義と授業づくりの課題」所収の資料Ⅲ-2①「教師の指導言」に、筆者が子どもの発言を加えて作成）

T. 1 全員へ	今日からは、みんなでもっと上手になっていくために、いろいろ作戦を立てたりね、しながら勉強してみましょう。
T. 2 全員へ	体育日記の方もすごく丁寧に書いてくれるようになりましたね。みんなの体育日記の中から次の勉強が選べますね。
T. 3 全員へ	（体育日記紹介）かなりね、守りが上手になってきている。（中略）相手も上手になってきているので、シュートしようと思っても目の前で手を広げて守られると、なかなかシュートできないということが書かれていましたね。（中略）例えば、目の前で手を広げられても、それに負けないでシュートする人達が（中略）なかなかすごいシュートをして点をとっているんだ。Iさんは、目の前で守られちゃったので、そのままシュートしてもだめだから、バスケットのように、こう、シューという山なりね、こういうようなシュートしてみたんだって。手の上からこうやっていくやつ。工夫はいいよね。だけどIさんによると、やっぱり失敗しちゃった。難しいってことが書いてありますね。
T. 4 全員へ	そうするとやっぱり、次のことをかんがえんといけんような気がします。どういうことかと言うと、守りが上手になってきて、守りにピタッと守られちゃうと、なかなかシュートできない。そこでね、例えば、こんな工夫が出てくるんだと思うんですね。Kさんが、こんなことを書いています。「（中略）やりながら1つこつを見つけました。それは、相手が投げたボールが当たらなくて、自分の組の人がボールをとって、その人が、相手の守りが少ないうちに、コーンのあるところまで行ってボールを投げればいいと思います。」
T. 5 全員へ	多分、このやり方は、足の速い人なら簡単にできると思います。じゃあ、足があんまり速くなくても、相手の守りがいないところでシュートするということはもうできないのかねえ。
T. 6 全員へ	1つの方法なんだけどね。これをみんなで最初に考えてみよう。例えば、相手の守りがピタッと、もう先に自分たちのところをもう守っちゃったとします。真上から見たと考えると下さい。このぐらいで、攻めが4人いたとします。守り、まずボールを持った人を大抵守るよね。守りがじゃあ、こんなふうにいるとしますよ。みんながボールを持ったこの人(a)だとします。シュートしますか？
P. 1	（一斉に）できない。
T. 7 全員へ	なかなかシュートできない。さあ、どうしましょう？相手の守りがいない間なら、打てるけど、そうじゃない。さあ、みんなならどうする？M君どうする？



P. 2	反対の方にいる仲間の方にパスをして、相手がこないうちに。そして、そこに（防御が一筆者註）来る前に、あの、……。
T. 8 全員へ	M君ならこの人（b）にパスする。シュートしてもらおう。この人（b）にパスをすればきっと、こういう人達（c <sub>1</sub> 、c <sub>2</sub> 、c <sub>3</sub> ）は、どうすると思う？
T. 9 全員へ	こっち（a）に来るよな。この人達（c <sub>1</sub> 、c <sub>2</sub> 、c <sub>3</sub> ）が、こっち（a）に来るまでにシュートすれば、ここ（b）には誰もいないだろう。パスというものをここで使おうじゃないか。
T. 10 全員へ	この人じゃない人にパスするっていう人はいませんか？（中略）じゃあなぜこの人（d）にパスしてもだめなの？
P. 3	前に（敵が一筆者註）いるから。
T. 11	ここ（c <sub>3</sub> ）いるからこの人（d）にパスしたって守られちゃう。
P. 4	前（防御側一筆者註）と後ろ（攻撃側一筆者註）が近すぎるから、さっと守られちゃう。

（黒板 c3 × を消しながら）

T. 12 全員へ	（中略）目の前にいないから、この人（d）に渡したとしても、（c <sub>2</sub> が）すぐにサッと近いから横へよっちゃうだろう。だからだめだ。とすると、この状態では、この人（b）が一番いいか。この人（e）も一緒かな？この人に渡しても、すぐ目の前、だめ
T. 13 全員へ	（体育日記紹介）「自分たちのチームは、○○ちゃんや、○○君がさわらなかった。だから次の試合では、ボールさわらなかつたり、1回もシュートできなかった人にパスしてあげようと思います。」パスをしてあげる、そういう優しい気持ちとっても大事なんですね。だけど、この人がここ（d）にいたとしたら、この人にいくらたくさんパスしてもこの人シュートできるかな？それを考えてほしい。その人がどこにいるかかがすごく問題になるね。
T. 14 全員へ	どこにいてほしい？守りがいない人のところへ行ってほしいよな。これ、気付いていた人いたよ。（O君）「僕は、こつを見つけました。もし、オレンジ対青だったら、オレンジがコーンにぶつけると、青に守られていない人にボールをパスしたらいいんじゃないかな。」誰でもいいってわけじゃない。（Nさん）「S君がT君にパスをしました。T君のところには、守る人がいなかったんで、コーンをめがけて投げると、コーンに当たり倒れました。」
T. 15 全員へ	こういう状態でパスをもらえば、チャンスも出てくる。そういうことをしっかり頭に入れて（中略）とくにこの間、シュート1回もしなかった人、チームの中にいるんですよね（中略）その人がシュートできるようなことを作戦として考えてあげてください。

示する場面で、教師は表2のような指導を行った。

表2のT.4の指導言にあるように、教師はまず、敵が防御する前に敵のゴール前に速く走って行ってシュートする速攻を提案した子どもの感想文を紹介する。次に教師はT.5で、「足があんまり速くなくても、相手の守りがいないところでシュートするということはもうできないのかねえ」と発問する。教師はT.7の右側にある図を板書し、T.6で前に敵のいるaが「シュートしますか」と発問する。子どもたちは一斉に「できない」と答える。

さらに教師は、T.7でM君にボールを持ったaが誰にパスすべきかを発問する。M君は、bへのパスと回答する。T.8及びT.9で、教師は「相手がこないうちに」というM君の発言の内容を補足し、敵のc1, c2, c3の防御がくる前にbの位置ならシュートする時間があると確認している。そして、なぜdにパスをしてはダメなのかを問うたT.10に対して、子どもから「前に敵がいる」「前と後ろが近すぎる」と防御が近くにいるからという理由がでてくる。そして教師はT.12で、dやeの場合も敵が目の前にいるという理由でパスをすることは不適当という結論を説明している。

T.5の発問では子どもの思考がゆさぶられていないと判断した教師は、T.6の発問で多くの子どもたちにパスの必要性に気づかせ、T.7の発問でM君から防御のいない場所にいる味方にパスをする回答を引き出している。さらに教師は、パスの理由を説明し切れていなかったM君の回答を補足して説明し、再度dへのパスが不適当な理由を問うことによって、敵が近くに

いる場合は不適という子どもの発言を導き出している。この教師の発問と説明の一連の教授行為によって、集団的な思考が促され、ゴール前の防御のいない味方にパスをしシュートさせる作戦の有効さが多くの子どもたちに理解されたと思われる。

#### b) 学習活動の中で到達目標を子どもたちに合意させるための教師のグループ<sup>20</sup>への言語指導の例

表3は、全16時間ある単元展開の第3次、第12時にあたる10月25日のオレンジ班の4人への教師の個別指導の言語の記録である。表1によれば、この日の子どもの活動は、まず味方4人でのパスからシュートの練習、次にシュートできない子どもがシュートできるように作戦作り、最後に試合というものであった。

この日の作戦作りの活動で、子どもの方から先生の指導を求めた形で教師のこのグループへの指導が始まっている。この日までグループのA子とN子の2人がまだ試合でシュートを成功させていないにもかかわらず、リーダーのT男は当初ふざけた様子であった。以下長くなるが表3の記録をもとに子どもと教師の言語指導を解釈する。

このT男に対して、教師は「N子さんのシュート成功はどうすればいい」と解決すべき課題を発問した。この発問に対してT男は「深く考え込む」ことになる。さらに続けて教師は「(直前にやった4人のパスからのシュート練習で)8点とれる力をもっているN子さんがシュートできるためには、あと何があるんだ」と発問する。ここでT男はやっと一人一人の動きを伴う作戦を提案する。しかしT男の提案した作戦はN子

表3 抽出班の作戦づくりの学習活動における教師の発問と子どもの発言 (1994年10月25日)  
 (上田隆司「体育における『グループ学習』に関する研究」所収の資料5-⑧⑨をもとに筆者が作成)

	言 葉
A子、N子	<各班に分かれて作戦づくりの課題にはいるよう教師より指示がある> (T男に対して質問)「ねえ、今日の作戦は？」 (S男、記録をする)
T男	「うん？まかせろ。」
N子	「パスをして・・・パスをして・・・」
T男	「せんせい・・・」(教師を呼ぶ)
S男	「守り：やっぱり全員守る。」
N子	「先生、全員守ったらねえ・・・だましてからねえ・・・」 (教師に話しかける)
A子	「そんなにだまされるわけじゃないでしょう。」
T1	「相手の守りをだましても・・・でもそのだましかたが問題。」
T男	(ふざけて)「『あっ、タワーだ』とか『あっ、UFOだ』とか。」
T2	「そういう意味か、やってみんさいや」
A子	「できるわけない」
T3	「T男、十字でやるってさあ、今までと変わらんじゃないの。今まで成功していないんだ。N子さんのシュート成功はどうすればいい。」 (シュート練習で)「8点とれる力を持っているN子さんがシュートできるためには、後何がいるんだ？」
T男	「ここにAさんがおって、ボールもつとる人の守りを寄せて、S男君・・・・それからN子さんがシュート」 (教師に対して)「できる？」
A子	「目の前に敵がおるじゃん」
T4	「N子さんが・・・」
A子	「もしもこうなったらどうする」
S男	「わかった、じゃあね、N子さんが開いとるかみるけえ」
T男	「だれが？」
N子	「俺N子さんのマークがおらんかったら投げて、それでシュートする」
T男	「引き寄せるって書いとけ」
T5	「N子さんがパスして、T男君の方まで」
A子	「守り」
T男	「パスっていうのはN子さんからパス？」
T6	「T男が何人引き寄せられるかが勝負で、N子さんが目の前に守りがい なかったら、大きい声でパスパスっていえる？」
T男	「わかった。こうやればいいんだ。S男君がぼくの内側におったら、そ ちの方でパスするまねをしてそれで全員S男君の方へいってN子さん の守りがいかなかったらパスしてシュート」
T7	「それでもいい。それでもN子さんはパスがたくさん来るから、長いパ スはとれる？」
A子	「取れんよ」
T8	「取れん。じゃあ短いパスしかしようがないんだ。いいかT男君の隣だ ぞ。反対側に来ちゃだめぞ。隣で。」
T男	「絶対、反対側にS男がおる。」
A子	「ここで、T男君で、横にパスしてN子さん。」
S男	「ワンバウンドすればいい。」
A子	「うん、ワンバウンド」
T男	「よし、今日この作戦で行こう。」
A子	「N子さんに・・・」
T男	「シュートさせる」(S男、作戦を記録に書く)
A子	「また、そのめあてだね。」
N子	「名前が書いてないじゃん。」
S男	「オウ、ノー」「試合の相手、赤の？」(S男、記録に名前を書く)
T男、N子	「白」

が敵の防御にはばまれることを考慮していなかった。教師は「目の前に相手がおるじゃん」と助言している。ここで、A子とS男が作戦をめぐって発言し、N子のシュートを成功させるための作戦作りにA子とS男が思考をはたらかして参加している様子がうかがえる。

こうした集団的な思考過程をへて、T男は「わかった、じゃあね、N子が開いとるかみるけえ」「あいてをね引き寄せるけえ」と発言する。これに対し、N子が「だれが」と質問し、それに答えてT男は「おれ、N子のマークがおらんかったら投げて、それでシュートする」と発言する。この段階で、T男とN子の間に、N子に敵の防御がついていなかったらT男がN子にパスをしてN子がシュートするという作戦の合意が成立していると思われる。このあとA子が作戦の理解を誤った内容の発言をしたために、再度教師が誰が誰にパスするのか確認の発問をしている。そしてやっと、T男が「分かった、こうやればいいんだ」と動作をつけながら、T男の隣に位置するS男にパスするふりをして防御がS男の方へ行ったとき、N子に防御がないことを確認してT男がN子にパスをして、N子がシュートするという作戦を提案する。

こうしてひとりひとりの動きと役割が明示される作戦が提案されるが、このあとさらに教師は「それでもいい。それでN子はパスがたくさんくるから、長いパスとれる」と発問する。これにA子が「とれんよ」と発言していることから、グループのメンバーの間で長いパスをとれないN子の問題が解決すべき課題として意識されていることがわかる。ここで教師は「とれん。じゃあ短いパスしかしょうがないんだ。い

いかT男の隣だぞ。反対側にきちゃだめぞ。隣で。」とT男とN子の位置を指示している。

T男は教師の提案にうなずいたあと、これに関連して「絶対、反対側にS男がおる」といい、A子も「ここで、T男で横にパスしてN子さん」と発言し、続いてS男が「ワンバウンドすればいい」とN子へ取りやすいパスの提案をし、A子が「うん、ワンバウンド」と繰り返し、T男が「よし、今日この作戦で行こう」とまとめている。ここにいたってやっと、4人全員が自分の動きと他人の動きの双方を理解して作戦の内容を合意できたと考えられる。

このグループへの指導は、相互に関連した4人の動きが具体的なイメージを伴って4人に合意されるために、いかに発問や助言や指示という教師の言語指導が必要であることを示している。パスをするT男が、長いパスを確実に受けることのできないN子の条件を考慮に入れて、N子がパスを受けることのできる作戦を考え、グループの4人でその内容を理解して合意するために、教師は子どもたちの思考にゆさぶりをかけ、発言を促す言語指導を行っているのである。

#### おわりに

小学校体育科の授業においてその日の学習課題を教師が子どもと発見する場面では、授業の個人の動作の習得が課題となる教材に加えて、複数の子どもが集団で実行する動作の習得が課題となる教材の場合も、子どもの思考をゆさぶるよう留意して発問や説明という言語指導を行うことが、「到達目標の学習目標化」を促す教授行為として留意すべき点である場合のあることが明らかとなった。

また、学習活動の場面では、まず動作の練習が課題となっている場合、子どもがつまづいている時に意識する身体部位の運動経過がイメージできるような言葉を、その練習に併行して即時的に子どもにかけると言語指導が「到達目標の学習目標化」を促す教授行為の留意点として指摘された。さらに、複数の子どもが集団で実行する動作の作戦づくりが課題となっている場合には、思考をゆさぶる発問や指示や助言等の言語指導を行うことが「到達目標の学習目標化」を促す留意点である場合のあることが明らかとなった。

ただし、これらの留意点はあくまでも少数の事例を通じて見出された知見である。これらの留意点が他の授業で妥当であることの実証は、今後の研究課題として残された。

#### <註及び文献>

- 1) 本稿では1983年に結成された全国到達度評価研究会の主張を、到達目標・評価論と記す。ここには、会の主張の特徴を到達目標を基準とした診断、形成、総括の各種の評価行為を駆使することで学力形成を保障しようとする点に求める立場が示されている。
- 2) 大津悦夫他『わかる授業づくりと到達度評価』地歴社、1984年、p.216.
- 3) 同上書、pp.215-217.
- 4) 同上書、p.217.
- 5) 小林一久『体育の授業づくり論』明治図書、1985年、p.118.
- 6) 小林一久は、「学級のすべての子どもが、基本的に同じ活動ができ、その意味が分かる範囲」で設定される目標を、「達成目標」という用語

で表している。「到達目標」という用語を使わない理由は、「到達目標」はあくまで教師の教えたことであり、教師の教えたことがすべて「子どもの学びたいものになる」わけではないからである。そこで、教師の教えた目標の中から子どもの課題意識に転化する目標を取り出して、それに「達成目標」という用語をあてるとしている。(小林一久、前掲書、p.118.) 到達目標・評価論の用語では、この「達成目標」は、「到達目標」の中の「学習目標」化される見通しを教師がもちうる部分の意味であると考えられる。

- 7) 小林一久、前掲書、pp.120-122.
- 8) 内海和雄他編『体育のめあてを生かす授業と評価』日本標準、1984年、p.58.
- 9) 同上書、p.60.
- 10) 木原成一郎「子どもが学ぶことを励ます体育の評価」学校体育研究同志会編『体育実践に新しい風を』大修館、1993年、pp.194-212.
- 11) ここで事例としたとりあげた授業は、広島大学付属小学校の林俊雄により1994年5月10日から5月13日までの3時間と同年10月6日から11月8日までの9時間、合計12時間実施された。5カ月の中断は教師側のやむを得ぬ事情による。この授業の目標分析、教材計画及び単元展開の決定は授業実践者である林が行った。そして、広島大学学校教育学部木原研究室と広島女子大学家政学部児童学科中瀬古研究室が共同で授業を観察し、授業記録を作成した。授業観察は、毎回少なくとも教官1名と学生2名で行い、教師の指導言をマイクロカセットテープで録音するとともに、教師の教授行動と、あらかじめ決めた抽出班の児童の行動と発言を2台のビデオ

カメラで録画した。教授行動を撮影するビデオカメラは、3脚で位置を固定してできるだけ客観的に資料を収集するよう努めた。児童の活動を撮影するビデオカメラは、子どもの活動に影響を与えないよう注意しつつ抽出班の動きに合わせて移動した。

授業記録は、教師の指導言及び抽出班の児童の行動と発言に関して、観察で集録した資料をもとに単元全体にわたって作成された。これらの授業記録は次の文献に集録されている。1) 上田隆司「体育における『グループ学習』に関する研究」広島大学大学院学校教育研究科1995年度修士論文。2) 斉藤紀子他「ボールゲーム指導における『全員シュート』の意義と授業づくりの課題」広島女子大学家政学部児童学科中瀬古研究室1994年度卒業論文。

- 12) 荒木豊「球技運動の技術構造と指導系統」『山梨大学教育学部紀要』第4号、1969年、p.207.
- 13) 同上書、p.214.
- 14) 同上書、pp.203-204.
- 15) 同上書、p.207.
- 16) 同上書、p.214.
- 17) 学校体育研究同志会編『体育の技術指導入門』ベースボール・マガジン社、1979年、p.73.ここ

では、体育科でスポーツ種目を教材として用いる場合、そのスポーツ種目でしか体験できない運動技術の特質を体育科の教育内容と捉えている。

- 18) 林俊雄「ドーナツボールの授業づくり」山本貞美編『新学力観にたった体育科授業モデル30選』明治図書、1995年、p.24.
- 19) この単元展開を作成する上で以下の文献を参照した。林俊雄、前掲書、pp.25-26. 斉藤紀子他、前掲書、第3章及び巻末資料。
- 20) この項のこどもの学習記録の資料は、上田隆司の前掲書から引用した。この上田の研究では、男子2名と女子2名の4人からなる特定グループを抽出し、この4人の授業での発言と行動をビデオカメラで記録した。この4人を抽出した理由は、このグループが教師の提示した学習課題を協力して学習する集団になりうる可能性をもっていた点にある。具体的にいえば、身体運動の技能のレベルが高いと同時に技能の低い子どもの立場に立って行動することのできるリーダーとなる可能性のある男子のT男と、身体運動の技能がかなり低い女子のN子がグループ内に含まれていた。